宇治拾遺物語　十一　（江戸後期）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

うすゆき物語　十一

三浦

宇治拾遺物語巻第十二目録

一 あをつね乃事
二 保輔盗人たる事
三 晴明を心見る僧乃事 付 晴明殺蛙事
四 河内守頼信平忠恒をせむる事
五 白川法皇北面受領の下りのまねの事
六 蔵人得業猿沢池龍乃事
七 清水寺御帳給る女の事

椙山女学園大学図書館

八 則光ぬす人をきる事
九 空入水したる僧乃事
十 日蔵上人吉野山にて鬼にあふ事
十一 丹後守保昌下向乃時致経父逢事
十二 出家功徳乃事

今はむかし村上乃御時古き宮乃御子にて左京大夫
なる人おはしけり長たかくしていみじくやせたりけるくいと
うあてかほいろはつゆくさの花をすりたるやうにて鼻の
だかくあかゝりけるまなじりあかくて色もなくゑめばはげける。
ほ乃あらはれたる歯ぐきあかくて世の人ににも
にずたちなまでにびきのゝしりて世の人のわらひ
ぐさにあをきふるまひてさらにあらくかくえ乃あさや
かにたてまつりてありけるかほもちびろうすくて色もなくゑみ
めば歯がちなるものゝ歯肉あかくてもいろもあか
まなじりあかくて声はしはがれてやせかくて
いひけるがうちわらひけるくびのながきあをねは世の人

義乃あつれもべしとてさりかぬ人あり數よ人ぬ
ありけるく給ひどに堀河中納言衣もかくそて戈さ
ちらとれうる座う風流人乃妻ハ五もひそ尻かくしと
しへあいきやうちやかまたにさ酒まてさりとし給ひり
五衣乃あが座りにめで世も地もそてより書き打ゐ
かいさし貌(あこめ)しとしさしぬきもさいろ乃さしぬき地をとき
乎ゐさ随身二人よまたそ給衣どり袴き世そびろりに
むしあ給くいろどりもかきれがしきにあをちぢれさうゐよ
こくひとをあけてさし出ぞ乎るとゝいまニ人ハ竹乃枝よ山鵜
を留めぞありつけてもくさせたり又給をりまなあるそず
のかれんよ酒たへをくまきう尻座うまでくち銭法て見

乎まり殿上乃ありにもち給ひ地そ出乎たれハ殿上人そのたく
もとおかむまもらひそよむおとゆびゆし御門きり世給て
あにすまそ殿上人よ状び乎くしきと地をゆるいとそえ世給へば
女房無道乃ま法ねよびくさあしへいろれ事にかるとて無の
てどもにとめられて手う罷あつひの袱まとらひハかくるとかけ
まこむハり座うにありふでまてひ乃かまいにぞ夜世給くおしこ
乃人よりのぞかせ給ひまれハ我よりそびめてひさたけろ将衣半よ
しあをむ地くれ袖どもどもさせてあれぞれば出れを笑ひおりまうせ
と酒給ん出ぞて魚之腹をさせ給ひそて以ゆじょうて又世給まふ
られくおえまめ乎座乃にさいあむ山へをかうるとあれけれざいよく
あんまうれあざ乎るもけり

今はむかし丹後守保昌が弟に兵衛尉にて冠給
はりたる保輔といふものありけり盗人の長にてぞ
ありける家ハ姉小路の南高倉の東にゐたり
ける家の奥に蔵をつくりて下をふかう
井のやうに掘りて太刀鞍鎧かぶと絹布などよ
ろづの売物をよび入てこふまゝに買てあたい
をとらせよといひて奥の蔵のかたへ具して行
きといひければあたひ給はらんとて行たるを蔵
の内へよび入つゝ掘たる穴へつき入つき入して
もて来たる物をばとりけりこの保輔がもとへ物もて
入るもののかへりゆくなしこの事を物うりあやしう

五.

おほくへども、うづみころしければ、此事をいふものなかりけり
きまでおほきなれば京中をしありくぬすみをしてすぎ
けり。これ事わづらはしくさはがれども、とらへられずなりけ
るに、そこへ人かへる事もなくすぎにけり
けり

むかし晴明が土御門の家に老しらみたる老僧きた
りぬ。十歳ばかりなる童部二人ぐしたり。晴明がなに
ぞの人にておはするぞととへば、はりまの国の者にて
候。陰陽師をならはんこゝろざしにて候。この道にことに
すぐれておはしますよしうけ給はりて、少々ならひま
いらせんとてまいりたるなりといへば、晴明が思やう

この法師はかしこき者にてあるなめり。我を心みんと
てきたるものなり。それにわろく見えてはわろかるべし。
この法師すこしひきまさぐらんと思ひて、ともなる童は
式神をつかひてきたるなめり。式神ならば、めし
かくせと心の中に念じて、袖の内にて印をむすびて
ひそかに呪をとなふ。さて法師にいふやう、とくかへりたまひね。
のちによき日して習はんとの給はん事どもはをしへ
たてまつらんといへば、法師あらたふとゝいひて、手をすりて
額にあてゝ立はしりぬ。いまはいぬらんと思ふに、法師
とまりて、さるべき所々、車宿などのぞきあり
きて、又まへによりていふやう、この供にさぶらひつる童

此二人ながら失なくはなれ給ひて帰らんと云ハバ晴
明は坊主帝まで此よしを申は度の事晴明は承り乃
ゆへに人々もみなもの見んとて参らんずるぞといへ
ども法師の此坊主にあらず君かたく申ける事とも
まはざりながらそれとでゆるし給ひてんとおもひければ
よりて坊乃人の見ん迚式神つかひてくるを
うとやましき代事におもはく法師が弟子を一人
さながらにても見え給ひしめ晴明が式神にいでさる事し
給べきとれて抛よむ坊主にしてまへどもあり
ふしきれば我乃方よりも年二人ながら入ぬ法師
のまへに出来きれども汝は法師のや坊主が實

に心中深るなり依事も御まくにへ人のつけ給へる
様なくとおもとして更にいかなる坊主のしれは今まであれど
へよは我ものにありてはたんといれども帝ところより
名誉にきいそぞくとて世にあり
此晴明あるとき此廣澤僧正の御坊にまいりて抛中
うきを給ふあいだ若僧ども乃それがあきなりけるに
いふ坊主式神を法乃に給ふなれども其ことの人
殊にも給し給坊主といふきれども坊主まくばかりてまつさ
しば刀殊にまそて出給してんといふさて事なんと殊に
もそしれ法ともまにもとおもふれば出てし何ごとかさて
いるとる坊主殊まで殊ぞ罷まま法へきれぞとなりぬ

まよしけりしやうにおぼしにて座に蛙の出きたるを六七
ひきとらへて池のうちへはなちけれども又あれいと川
さらばはなちし給ひなんと僧のかたはらをはなれず法残
はかり給ふ坊の前に進みて座をはなれずしはなれずして世
去りてまゐらんとてあまりに緒つきたまひて物をとよむ
座に侍してかの坊のうち人々まゐりけれどもかの
草の葉の蛙のうへにはつてはなれずかゝる所に
よろしきて死ぬるとはなれず見えて僧どもはなれ
かへりてかの法師とて見るに家の中に入をき給
つくはあの古き木を治れものや人をもなげきつゝ
藪などあまたありしに門をさしければ去りぬ

むかし河内守頼信上野守にてありしとき坂東に
忠恒といふ兵ありける仰事をおろそかにせる
こゝろありしかばほろぼさんとて軍をゐてかれがすみかの方へ
行むかひしに入海のむかひにすみかありければ
をわたりてゆかばあまたの入海をまはるべし七八日
よりあるべきをまいりてその日の中にせめん
とおもひけれど忠恒わたりの船どもをかくしてけり
ていかにもわたるべきやうもなし浜ばたにうち立
てあるに上野守のまへにゆきてありければ云大平
そこなる浜にてありけるが入海のまゝにせ
だにこれへなんといふ人あるまじ

さうまかんきよ乃ころなりませてせめんとこそあれ宇治川
は春おりふしまさりてあかりて流まさんずれまさるに兵ども
三郎とりもあへずいつもすべき軍どもにさき
達者るに軍ども更に渡しぬべき所もなく廻て
ここにもせさゞ路へくいとやまれば此軍ども此中
よりさととも志乃道しるしせむとも乃ハあるまじ人頼信
八坂東方にこれを見びこえてまづはじめてそれはさきに進どて乱
家乃つよくさきてきときて陣事あり此の海の中
よは堤乃辺りにて長さ一丈ばかりの志きくだくにとち
者ある所あまたゆう深く流されたる是をまたにも浅き所をさくるの
頼よしてそこを見るにすでにある人どもまぎれも乃

軍どもは乃中に志りゆるまでおるそんきうばかり兵よたち
くりさせ頼信はくきてまうさんとてるをかきたやめて
よりともいはれくしみをもとめやありきん宣の陣どのたり
る我海よりちたへして先すらうるにしたうまれぬたは
法きて六百騎は軍せりまうしきり海よりにてる着き
勝は先をもちてまさる流からの兵たれ中より先だ二人まさ
つまろこれをみて志りまるも家をもあひつとまをとらざ
つましまりさく事すべてにもあつきまはれてこの守敏
此宝をもてはかこれをてついてなそこにぬするにぬなれこれ
乃重代のものなりとてあるにたへぞにもとめまれね
よかくこりゆへかとなにまかへしてまた人なきくるくるに兵乃さくれ

とこれさし居きかちてまうも孫などに忠恒ハうたを
さかうしてぞうせ給へんぞらん。身をたゝれなくし見ば
わきさら我も我だくらうこそ古り其れせずしは無こと
さとり給ひし濱をまつり給ひんかるは近おくるし
述を志そんさうなく無に無く世界給ちへと。おもはれ
るくむ志保うの軍かへるくめる際に家の働かなる
郎等あまそてそうと死にくいたく上野殿ハこの海の
中に流きみち沈はまるよりかたくの軍せい見
してもそでにちくへ未給はねつくをぞせ給たんとて
あきまるよあたくて心をれば忠恒のねをくさき
くにをきあれく我をもぞにもあられ有んもぞかるに志も

てをてまつらんと云て其ちはちよそやうに我うさて
うさみすはそれてさし上て小船に郎等一人乗せてまち
てむかへおまさつるせ其の参れバ守殿さを使そやう姫を
きそるせていたくかかうにそやうそうよかこそ其のかき我くへて
いご流せでよきされ前やさまでわれかうにもむべきよ
あるにかくし本文をさまてる我引くへしきれて軍大勢
入りもえをかるちのかうは心やく守殿をたまはとにはく
いあんとぎさんへおかそしますとはいよいよそれ給まはり
志ろまじをいまはむろし白川法皇受領の国へくまま
しけるときは面乃是れぞもとに受領乃国へくるかの孫
ぜさ給ひてれ発んあるへしとて三番頭久米とにふもの

拝命して衣冠まきぬつくしてうちのみの位だにと
ちとまで前駈を此世清府ともをだに御ふれとなし
て法師あるべしとてをれく錦唐綾を着きて押し
じと志まふらよ右衛門尉源行遠かまへと出立て人は
かねてみしれ人見物れぬべしとて法おちかうしは家
人の家に入ゆく従者をよびて風情のさま法わか道
まてさんくらとみてさいはせてきまるもむとにえたう
きれだいうにおうへちとうきよかと共法の時こそ
をよかしはあるべしさるふといふ宮之午未の時より
まらうんどをさへまてと思て待わたる事門の方に
ありしてあそ道ゆるしありつるよ見くくといへたん

まゐる掲紙のかうんと思ふほどに右兵衛殿の国司姿にて
れうしかきも法ましといふ前左衛門殿は錦をき給ひけれ
源兵衛殿もねれ掲紙して今日の文をと法きて待おはせ
ふわ御しうかずして御されとよべしいみくあまて
やり法の男あへしつぎつぎ大路かそうりの見物法
ずめも民ふも掲みて色はえらず院乃法橋殿のくる
しありて年まるも法るさ日見目もとよれさふる
いふまではかみといへではやうそはぬといふことはいろに
きてへつをねずといふ色のあるいくあることくにうさふか
んさいふでてかくくあとせせさへて目を共てめずよ
こえてさかりぬずかしといふ大ゆるとあくいふそうりはなし

さるほどに行遠ハ進奉不参して奇怪なりとてかま
めしこめよとおほせくだされて廿日あまりハひさしく
ありけるにこの志ざつ城きこしめしてまかりいでよとて
ゆるしてけりしかれハゆりてまゐるとぞ

今ハむかしならに蔵人得業恵印とふ
僧ありけり鼻おほきにてあかかりければ大鼻の蔵
人得業といひけるを後ざまにハことばながしとて
鼻蔵人とぞいひける猶のちにハ鼻蔵〳〵と
のミいひけりそれがわかかりける時に猿沢の池の
はたにその月のその日この池より竜のぼらんずる
なりといふ札をたてけるを往来の者わかきおいたる
者さるべき人々ゆかしき事かなとささめきあひたり
この鼻蔵人をかしき事かな我したる事を人々さ
わぎあひたりをこの事かなと心中にをかしく思へ
どもすかしふせんとてそらしらずして過行ほどに
その月になりぬ大かた大和河内和泉摂津国の者
まできゝつたへてつどひあひたり恵印いかにかくは
あつまるなにかあらんやうのあらんとあやしき
ことなれどもさりげなくてすぎゆくほどに
すでにその日になりぬれば道もさりあへずひ
しめきあつまるその時になりてこの恵印
思ふやうたゞ事にもあらじ我したる事なれどもやう

乃わらはよくしとおもはれども此の事さともわきまへずらん
りくさんともしく頭流しみてゆくえりくちくまり
流りしつきうるもあらず其鼻福ある乃南大門乃壇に
上よのかかり出たちていまや我のめがるうくと
まち出られども奈よ此の鼻んぞ目を入ぬくそ
よ奈りもてさらにあてかくてあるべき事禄むつり
まゐる乃よ此と流橋よ目くらかりあはれやまると
この恵示あれあぶらの目くら座といはゆり出家たる
めでたきなとをあへもて何し鼻くされなりといはれ
けるこの恵示様これをきいてもきかざるなきれども
同くとと云ふはつきてあらしくれたられなりといはれ

寺家の鼻くされつれあさましく出さるゝがたびしき事
乃一なりとう
其のはむかし出ける比ひかりける女此清水にあゆみ
よき人の家あるじ有り年月清水へまゐりけれども
此志すしとかくて出けるおとはしく出るより多く成
させたまひてもえむしたまひ御殿あるとけにこなたをも乃さ
也なくあるともまたてまへにばく成るをなるとける海くに
なりて観音をたのみてびふなふれと世にもしくし
なりとも出たすとりける行いけんとぞいひけるとぞ
かてゆきよう情はかくも出ありまゐるよ乃夜にはなよ
つとめてかくあるのちのよかせぞいとけしきもかはりめでたし

もてなしまでもあるべきにかゝはりのなまぎれざる風聲
きこゆれば然しいかなりとも道理を以て法
性の中なる事といふともよくよくみてそのうちを悟
と見えて萬を見くだく人ありし人の心にまかせて菩提の
おもく法性の心ざし法道に住して真の人にある様見
なりよざれと道理すら心にかなはざるの拙の道理に出
そあん道理と思ふよ此れなどの思ひしかまへてなく
てや衆生にかれしらにあらじ凡てその者をもしなて
なし花をも流ちやうは ねひくせんとして思
はよ然ば法性の法だなりてまいり出へき衆をも作え
ず迷ひしまよひせずまよひしなんとして大なるせきの内に

さし入くさきねがはくば後生入てくる菩提にあひさ
ろしくもあるぞ其ゆゑ心ざん拙識ハ絶えて加る
かへしまひするあやし此事なりとてまよひ絶え
なと見ゆるさて之見其ゆゑに直に衆生にあはれ
あまた道なく迷ひしまひせ川やうに志してよ
迷ひ其まてまつ流は道理を流しくしてそれ
の其れの志の之れの之くゆゑてまつりんはむくいある
べきうしをいはゆるめしれ道理ならむと思ふ
雅んちる僧ハ法性のうちにて識ぬすなはち其ところやう
其かなんむらんと思ふもくるし是れよりまた夜好
くみてあれば入るくほのうちにも出よりけり道理識いはれに心

まさべきならんと思ひてひきのけて見てければ
衣をも取りにさしてこれをときぬれてきんとかきよ
ふつきぬ。この法師もいしてきて乃ちみところか
ところもあまた女もあれ。おのれはことにかしき
を見よ思えればくれぞ法なる人のもとより物とお
かく思ひてまいり。大事する人乃うへをもとる乃
きぬをとらくしてねうんぜと渡きとらするもさるを
くやしき世をれものがれにけりまもひやくにたつ
人乃よるよる物をとりて此男りをも思ひなれてくる
乃しくてぞあつまりけるさまにぞ衣をとがめて。
かゝるにぞさんぞかもはしとのかりにぞとり出きける。

かゝることなんありけり
いまはむかし駿河前司橘季通が父に陸奥前司
のりみつといふ人ありけり兵の家にはあらねども人に所
おかれ力などいみじうつよかりける世のおぼえなどもあり
けりわかくて衛府の蔵人にぞありける時殿居
所より女のもとへ行とて太刀ばかりをはきて小舎
人童をたゞひとり具して大宮をくだりにいきければ
大垣の内に人の立てるけしきのしければ恐しと
思て過けるほどに八九日の夜ふけて月は西山に
ちかくなりたれば西の大墻の内はかげにて人の立てらん
も見えぬに大垣の方より声ばかりしてあれはすぐる

人さりけると申ける道乃かたへしかの寺ず忍び入て見てあれば
といひければされハこそと思ひすこしもあゆミてゆける
をおきまいらせてやよかりける人ぞとてまくかゝりてものゝき
けれバうつぶきてみるに弓矢のきハみしもて太刀乃きらく
として見てけれバ本より八あやしきものと思ひけるに
ついいかにして逃を追付てくれけれバうちはらひまぬとお
かゆまいらせ給ふかゝるよかへらさ雨よ年とくするとくれバ
をと地のかくしけるをやすくつりて見てそば過りあへむとさ蛇
よ出来とれけれバ走りかゝりてくみちがへねきて打されハ
頭をど中よりとうちとり出来ず南まいらせ給ふ御はくて
つとまうけぬよりさんとかもふかどにあまいへいれた

ゑ浦る方とつきくまろく抱たりけるかたりくれけれバ太刀
をとも見さしあへもて脇よ大きさ見てなく浦をときゝすけ
き屋に乃肌とつかくたちるとあつきてくるもの大しく
乃よるとなさしるをみてかへしまれけれバ南まいらせよとあり
清る屋くりはたくくまいらんとおもく儀よかくり南まいらせ
とりけるをやすりと出るものりて気よまいらせ候ぎく
こ涙御前よ出とつまいらるかわきる我ちかひくたちかく
つまそかきし出そてにれわを又うちよりてきり。つまよも
かくと取りよ御どにこ人あるとこれバ今ひとりとりさせて
ハ見て屋るしきをやきくしてつく屋川乃肌見て出る孫
かくたるとかりてきけまいらせ乃出びハとれバあや

まうしけれども秋弘是をきゝ給へと云て太刀
ぬきかけ座うに飛出てきりつけ給へどもやまうらも
のまにもかまはず是を打むかひ常是もいづるくも
あはせてとりつゞきあはれにきり座りをもきりきれ
どもあやまちにちかくよりてあはれかはきぬに
されど是をきりわけ乃座うにをちたりける太刀あり
をとりてうき〱しく中よりきりたる所を太刀
乃束をぬきてもとのきさ候まで是を常是まうけ氏殿
きりとて常是で太刀をもち是を承りいはれをかたちより
たとして宗りさてそれらのまてすゑ人座あると見く
をとさども人乃をと是をぎりられあもとよりぬれて

中納言乃門より入るくもちらにられかはれく是をもちて小舎
人童しはひらく志治うんと給まれ是童は大きなきとの参り
よなくしくきさ常なる様もむぐまひれば大にゆかてよりめ
きよ常り厳居所よ座りてきくへとみよせてさうる
ゐへをと此きりもゑるう人乃きねさしぬきうは血乃
法まくもうり常連る是し童して娘くかくさせて音のの
口よりかくめて太刀に血乃つきたるあはれ石と音さ
めて厳の所よさるとも取くて入るく常にぞいふも
すかう乱とる事取とさしてやあらんぞいくとむね
うちさた此くかりよそとによあまでのち抱かせ
これさたく大きな大炊殿門へよ大事な流男三人いく

なれどもつゞてもきかうともせざるあひだほしくつかは
せける太刀の柄かゞみよきり合て死ぬるかとこそ見れ
ども手ばかり太刀の疵はさほどなり敵の志てうける
まやされどもねもんをたゞし死にさまで志てみしかど
いはれ乃志るに雅厳上人どもいつかゆきてかんくさん
とてさられてゆきをゆるしたまへやとみへどもいはざ
らんをきゝてよろこばれぬさは御堂ぶくよりいね
車に乃りこみ道てのぼりよせてされば御きよもさそも
くをしなさでも鈍あかりきんを年ばすあまり
ぞうとなるに男乃かうるはもの也けるが無文乃袴（えりまき）よこえん
のあられさししのあちきさ山吹のきぬ乃袖よくさら

さま道見せける鈍くるが狭乃さや清かれたりさえてしかすらず
せもらせきて車の後れまいらよ当きたるとも鈍あし
くりときゝをとかきはよれいそぎてむきかうしき
抱ひし男ぜてりやうに男よりとみるほどに雑色の
よりきてあの所とこのをとんつくをたにあかれくつ
うちつりせぶとやとんあ御道をぞうきくもか
はる所とこの帆とかよよらどに車乃すのへよみなちく
清厳上人の御なをも先しよせよみさいとたんと
いふぞ雑色共しもつゞまりてめしをてきてむちこれ
むせきりつてはきりてかどいれ出りたる肌さうりを
つゝとあられきらびやかに男の血目にさめしかさひさつき

くみともれは行ゆにぬ銭のまてあるなといふ者有けり
有ぬとうぞと人々しるの夜中ばかりに盗人さし入ぬ
まて銭を盗とりき行る間に盗の三人かまへ入る程
ますぎる人屋とてもしほ行しさそて隠うでまゐるを
ねむる人あめりと思ひ行人まくあへくへみせて帰なり。
けさ見れば事にけり銭を取しと思ひ侍る御心さしへ
りつてさ事をいひまれば数まて仕り其事をきる事あり
と思ひまつし志や何とも銭さへて如くさ事し投也
こ年もちぬいぬをとがをとき取とかくかひなるられ
老人くさてくといれくされけしくてく翁承屋
うけしそかりを承ゐる御時までへ人よゆへりえ

面ともしらずぞらまぞてこけるものしきやまるからん
と人々あきれぬ見るまれとまれと南乃こそまのでぞき
まとりきれば見られけよゆへりて屋を行とかられての
ちよみをぞもとり我はかゝりけるに
おはきをいふ事ハむかしかゝる所よ所なぎんする所と
くまり祇陀林(ぎだりん)る寺にして百日讃(さん)法かことひれぬれ
ちかきあとの道をのぞきもあるをさ者まあるべかりき
わがふ女房車乃ひまなくこれを見あきれ
する僧乃ありける目出と人々あへんあへせす
殊なりめなく時くあまた給をとよりぬるぞ歳
くらひいふぞりえてかる者ハ念仏なめりとぞ

またとき〳〵そゝといきをはなつやうにしてあつま
れる者どものかほを見わたせハその目に
見あはせんとあつまれるものどもこちおしあち
おしひしめきあひけりさてすでにその日のつと
めてより堂へ入てさきにさし入たる僧どもおほくあ
ゆみ続きたりしりに雑役車にこの僧ハ紙の
衣袈裟などきて乗たりけりなにといふにかくち
びるはたらく人に目も見あはせずしてとき〳〵大い
きをはなつ行道にたちならびたる見物のものどもうちま
きを霰のふるやうになげちらす聖
いかにかく目鼻にいるたへがたし心ざしあらハかみ
ぶくろなどにつゝみて我ゐたる所へおくれとゝき〳〵
いふ是を無下の者ハ手をすりておがむすこし
物の心ある者ハなどかうハこの聖ハいふぞたゞいま
水に入なんずるにぎだりんへやれ目鼻に入
たへがたきなどいふこそあやしけれなどさゝめく
ものもありさてやりもてゆきて七条の末にやり
出したれハ京よりはまさりて入水の聖をがまん
とて河原の石よりもおほく人つどひたり河ばたへ
車やりよせてたてれハ聖たゞいまハなん時ぞと
いふともなる僧ども申のくだりになりはべりといふ
往生の刻限にハまだしかんなるハ今すこしくらせと

にふ移り移くも我くるときくるをれハ極なぞし
て河原人ちくあるよるとねもりをみるてんと思ひ給
を乃しあ我弟子らそれが中よ僧乃あるが往生よれハ
剣涙やえさくむべきゐくねらとされといひを向くいのか
わとにおぬ乃屋等をじ乾りて垂よむらけく河よざさ
ありと入れどに身だくかるにあしをとりそて
流ぶりをもいくぞしむしおくなどに弟子乃座まで
し告通ハさるき海よいりてまみくとするを男乃
川へ私もくちぶりてふくこむしをて告ぞるなりこれ座
乃よもとありて引あげたれバ左右乃手してかほはら
ひてくゝみたる水をはきすてゝこの引上たる男

にむかひて手をすりて廣大乃御恩蒙さふらひぬこ
乃御恩ハ極樂にて申さふらハんといひてくがへ走のぼるを
のぞみてあつまりたるものども童部河原
乃石をとりてまきかくるやうに打はだかなる法師
乃川原くだりにはしるをあつまれるものどもうけとりうけ
とりうちけれバかしらうちわられにけりこ乃法師にや
ありけん大和より瓜を人のもとへやりける文乃
うはがきにさき乃入水乃上人とかきたりける
とか
むかし〳〵吉野山乃日蔵のきみよしの乃おくにおこなひ
ありきたまひけるにたけ七尺ばかり乃鬼身の色ハ紺青

乃ゐまして娘女ハ大乃ちやくにあいかくべいおそくむね骨
えおとにさし出ぐりつかぬきちあれく腕ハおそくえ
きゝるハあの乃かこあれ人よあれらくよ紙つねたくちよくゆき
りぎらまあしこれえをに来する鬼ならとえハ方乃鬼派
まむをびおりしゃ命ぐまれそこの世の百年をすぎて
乃むりし人〃そてはしが人への手えんようしみくのつて
いままでかて氣鬼乃所とありてはさてされる孫
ハ思乃おびとくにいるもちろしてたゞうまづ子孫のこゝろ
ろよりさあまて乃おうかく出し渡しそく
いまハあろきゝ人き袖なくひるもぬされだに故つねく
らむしまのせかくる満る渡すてもおりてやうころ

きんと折りればよつきて乃むまれ成霧をちて称
とうとお渡もるべき座く成し瞋恚乃わが間まで前
ど座くよるを地まつても敵乃子孫を共にしてゐ
ま氣なり深きをぬ瞋恚乃符のかよもくこが
まそてせんりくれきくるしこ地のこうきを待りかゝ派
仏をかこさらいれりは極楽天上をもむまれ
けまし者とにてしゑんをとそぢ先そかて深所せ
あちとて無量億劫乃苦をとうきんと十悪業の
きんかさあくのあしくいん人乃をも先ようしみをのえ
もとは志りしあうくつきう所すれ若あつそくしてあるまれ
敵乃つひ孫ハ深きてそてぬまろい乃ちハきうへまうを

さしあはせこの風くと申しければかの鬼
鬼ハ乃ことばをきゝしらはきてよろこびを
なしてわかくしかぎりなしそれよりかしこく
しんさうの風うくもいそぎつゝきて山のかくさ
へあゆみ入給ひさて日数のきみあくれとわすれ
くらけがたきみなよきはぐのつえぶつきさりそて
誠に路をすぢと行く

これもいまはむかし丹後守保昌任国へくだりける
ときよさ乃山にて白髪乃武士一騎あひたり路の
かたはらなる木乃下にうち入てたてりけるを国
司乃郎等どもこの翁なにぞ馬よりおりざる
奇怪なりとがめおろすべしといふ爰に国司のい
はく一人当千乃馬乃たてやう也たゞ者にあら
ぬ人ぞとがむべからずとせいしてうちすぐる程に
三町ばかり行て大矢乃左衛門尉致経数多の兵を
ぐしてあへり国司会釈する間致経がいはく翁
に老たる一人逢奉りて候つらん致経が父平五大夫
にて候堅固乃田舎人にて子細をしらず無礼を現
しいつらんといふ致経過て乃ち国司さればこそといひ
けるとか

これもいまはむかしちくしにたうさかのさへと申
斎乃神まします其ほこらに修行しける僧の
宿りてねたりける夜夜中ばかりにはなりぬらん
と思ふ程に馬乃あしおとあまたして人乃すぐ
ときく程に斎はましますかととふ声すこのやどり
たる僧あやしときく程にこのほこら乃内より
侍りといらふなり又あさましときけば明日武蔵
寺にやまいり給ふととふなればさもはべらず何事
の侍るぞといらふ明日武蔵寺に新仏いで給べしとて

く梵天帝尺諸天龍神あはれみをたれ給ふことはり
給ひぬるといふなれバさる事を見しらせ給ふ
ぎうをきらうまつくつを給つるかれいふそてかさいてハ給
ぶらんかあらむぞさらへんずるとつへだささいあるの
巳時えうりのちかとありかずかぎりさいへ給へまちや
さんそてるぬこの僧こまもときゝて希有の事をを
きゝつるかなわれてハ地へゆかんと思はまどるこのおもとみ
てあそていはちもゆかれんと思ふくあくるやとそ纔むむ
ましき寺にまゐりてみれどもさらにきこしもなしいより
ハやく志けりに人をみてこれあるみかあらんと思て佛の
清まの人ろよいて巳時をとまちたてまつるほどに今志すしてあ
らく午時になりぬれんをいかゞなかにいらんと思ひたてまつるほど
まそし七十あまりなるらんけなる翁の髪をもそそりてしろく
きそをきてもあるらてあるほとにあまり給へおかしとてかゐそて
をそもちへさゝえたゆゐおかけてまわりありさる杖よけずがりて
あゆむあらりに尼あそてうちいさくうゝけき桶ほりにて
あらゝむ地つまにてむきくさけまゐり法堂のまへまゐりて男
ハのどかきみ佛まつりてねたう二三度手はきて志ととく見
ばれ念珠の大きに高くきけ尤しかもさくはんじ尼ぎみの
をとたふら小桶をと翁のかくふとしにをきて法華をよみ
らんをていぬ法ぶらうしはらくもあまりは六十ばかりなりける僧
まいりもそて佛がけらんをそまつりて去にさんにまれ

作るそへくきなふあすまをしぬ此まさかり
あらに出されども志乃ゝまかりつれこゝまでまゐるを
拙らくれ共まに出さんと思ふおりとも也ハ僧目を
しもやていひも書きしを紀事乃品さゝぐ書きとくと
て小補あらはるゝハ猶あり常とよみれゆるて以ある
ゆゑく判甚の戒をはきつまでずまき紙がきまうて
つまおねてれのらまくさと事はしさえ二九翁の活師よ
ある雅随此志さく天承のあ流するこ録せハ新紙乃ぞさ
を強ふとしあるにしてしあり生れお家随ふみかとぞくと
も今にくしめ事まる事にはありねうまして可あくさうかもんの
めくた然出でして随おぼえはれ功徳尤り是にまくさうかのかくらり

萬葉和歌集　全二十冊

同　拾穗抄　同　傍註

同　山常百首　本居太平大人著

堀川院百首　大本 中本　全三冊

同　治良百首　同　上　薄葉摺

和歌伊勢海　全三冊
名所百首并繪圖百体百人一首和漢詩歌合染筆相傳故實○色紙短冊書法○屛風押色紙の法等ホ詳に記す

十六夜日記　全三冊

同　殘月抄　全三冊
阿仏尼公鎌倉下向の紀行にて松平大人是を註書に按訂して委しく註釋す且古圖を加へいと稀なる道の記く

源氏物語評釋　大本 小本 半裁本 繪入　萩原廣道大人述
此書ハ契沖主ハ潤宣長主ヲ余諸大人の説を取捨して今案を増補し名文の名文たる所を解剖して作者の深意を釋著し且文の係ハ近世の俗語を注し婦童も容易く心得らるゝやう叮寧に釋諭されたる書なり

同

秋の夜長物語　全一冊

八代集　後撰集 拾遺集 千載集 新古今集　中本 小本 袖珍本 出來　薄葉摺

同　類題集

三代集

古今和歌集　大本 中本 小本 掌中本 袖珍本 出來　薄葉摺

二十四代集　中本　全一冊

練玉和歌抄　折本　全一帖
二十一代練玉の表書ハ八代集中より拔萃して懷要とす

古語深秘抄　全十冊 合本三冊
歌學の書十九種を集て古語深秘抄と題す歌道秘中の秘抄○和歌肝要○和歌式○和歌庭訓○和歌口傳○和歌用意○詠歌の大概○詠歌一体○和歌八病の編○和歌の三要七ヶ条○後京極殿御口傳○余材抄○公任卿船恒後成家隆爲家以下の名家の撰にて歌學の書の是に勝るものなし

近世名家集類題　中本　全七冊
契沖吉滿主ハ潤宣長蒲蓮菴藤成章千蔭吉滿秋成雅春海宣長平春樹大人等名の名家の大人方數百家の秀詠を殘さず集に今に雅を類纂して行紙抄更に懷中用役則近世の家集最第一の書なり

和歌御書物所
京都三條通堺町
出雲寺松栢堂